

## 『新教』第6巻第1号掲載の牧口常三郎の論考5編

塩 原 将 行

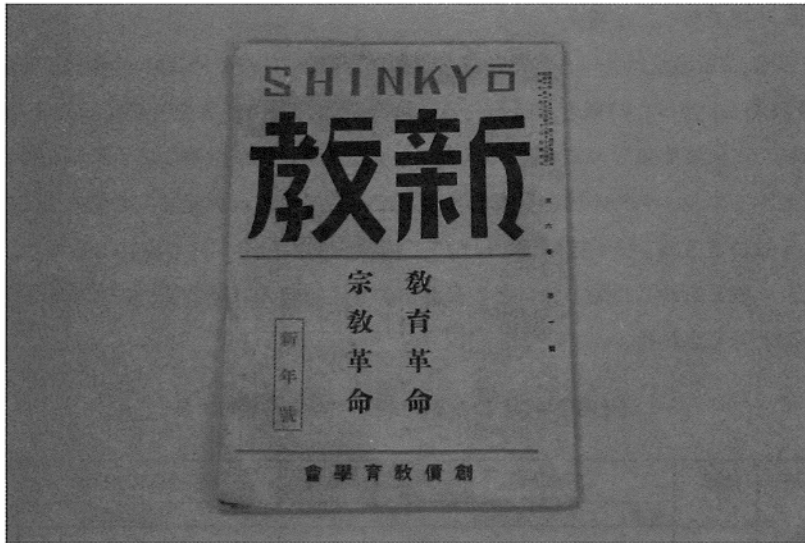
### (解題)

このたび紹介するのは、新発見の資料である。それは、1936（昭和11）年1月に出版された『新教』第6巻第1号に掲載されている牧口常三郎の論考5編である。第6巻第2号から第6号までの牧口の論考は第三文明社版の『牧口常三郎全集・第9巻』に収録されているが、第1号の内容については、同号が未発見であったためこれまで不明のままであった。

最初に、『新教』について。『新教』は、創価教育学会から初めて発行された月刊誌である。編輯兼発行人は戸田城外。第三種郵便物認可の日付は、1932（昭和7）年12月28日である。これは、1933（昭和8）年頃に城文堂から発行された『進展環境新教材集録』、及び、1934（昭和9）年頃に日本小学館から発行された『新教材集録』と同じである。このことから、それらは順次改題されてきたものである。

『新教材集録』から『新教』に改題された時期については、該当する時期の『新教』は存在しないが、江沢敏和氏の指摘によれば、『生活学校』昭和10年7・8月号の交換雑誌欄に『新教材集録』があるが、9月号の交換雑誌欄では、『新教』となっているので、この時期に改題されたと考えられる。また、『新教』も、1936（昭和11）年の第7号からは『教育改造』と改題されているが、発行所は、創価教育学会のままである。よって、『新教』が発行されたのは、1935（昭和10）年7月頃から、1936（昭和11）年6月の第6号までの約1年間ということになる。現存する『新教』は、この第6巻第1号から第6号までで、1935（昭和10）年に出版された第5巻の『新教』は見つかっていない。そのため、この第6巻第1号は、現存する『新教』の最も初期のものである。

次に、『新教』の内容について述べてみたい。同誌が、創価教育学会の最初の機関誌であることは先に述べたとおりである。1936（昭和11）年という年は、創価教育学会として機関誌を持つ必要があると考え始めた時期ではないだろうか。しかし、会員は、それ程多いとは思えない。なぜなら、翻刻の3番目に紹介する「若い教育者の嫁取り相談に應じて」の「七、人の運命の豫想」には、「僕等にはまた多数には上らないが、數十人の仲間が出来て居る必要とあらば何時でもお見かけられる」（下線筆者）とあり、当時のおおよその会員数が推測できるからである。そのため、『新教』は、会員の購読料で維持されている機関誌というよりは、編輯兼発行人である戸田城外が毎月印刷費を負担、創価教育学会の活動を紹介するために出版していた機関誌ではないか、と推測することができる。



『新教』第6巻第1号

創価教育学会の初めての機関誌である同誌の性格を反映して、表紙には、「教育革命」「宗教革命」という文字が大きく印刷されている。これは、現存する『新教』すべてに共通している。最初に紹介する巻頭言のタイトルは、「教育宗教革命」であり、次の第1号のメインとなる論文も、「教育宗教革命の提唱」である。そして、三番目に紹介する「創価教育學講座（第一講）」も、「一、教育學革命に對する創価教育學の意義」「二、教育宗教の革命と指導階級」から始まる。年の初めの第1号であることから、このような論考等が続いているとも考えられるが、1936（昭和11）年は、牧口にとっても、創価教育学会にとっても、教育現場の改善、教育改革から一歩踏み出して教育革命宗教革命に踏み出す節目の年なのではないかと推測する（この点については、古川敦氏の指摘による）。

1936（昭和11）年7月には、『新教』から『教育改造』に改題されることになるが、同誌は、改題された第7号のみ内容を知ることができる。いつまで出版されたかも判明していない。この後、創価教育学会の機関紙が発行されるのは、1941（昭和16）年7月の『価値創造』創刊まで5年間も待たなければならない。この間、創価教育学会として出版しているのは、1937（昭和12）年9月の『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』という小冊子1冊である。

『新教』発行当時の戸田城外の会社の経営状況を知るために、帝国興信所が発行している『帝国信用録』の戸田甚一（本名）に関する記述を表にしたので掲載する。同書では、戸田が出版業を開業したのは、1930（昭和5）年となっている。しかし、その前年に城文堂から戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』を出版しているので、1929（昭和4）年から調査した。しかし、『帝国信用録』に記載されているのは、1934（昭和9）年から1943（昭和18）年までである。その間、1935（昭和10）年と1937（昭和12）年は、対物信用は「負債」とあり、対人信用も「稍（やや）薄」とあり、五段階の下から二段目である。盛衰も「稍衰」で同様五段階の下から二段目である。1936（昭和11）年は、掲載もされていない。『新教』が発行された頃は、戸田の事業が

極めて苦しい時期であったと考えられる。

牧口にとって、『新教』が発行された1935（昭和10）年から1936（昭和11）年は、日蓮仏法の研鑽により深く入っていった時期と考えられる。堀日亨は、雪山書房発行の『雪山書報』（昭和10年9月6日）に、「夫に原稿等の方面には従前の通り三人の学生が従事してくれ常在寺々主が校正を督して下ださるので、老朽の房主も大助りの処に、竹尾清澄氏が非常に老僧の苦勞に同情せられて信友なる牧口常三郎、神子精両氏を以つて、編輯の助力を為すべく申し出られ」とある。『富士宗学要集』の編纂を通じた堀と牧口との交流により、牧口の日蓮仏法への理解も急速に深まっていたものと考えられる。

#### 『帝国信用録』にみる戸田甚一の会社の経営状況

年	版	職業	對物信用		對人信用		年商内高又は収入		盛衰	
			符号	符号の意味	符号	符号の意味	符号	符号の意味	符号	符号の意味
昭和4年	第22版									
昭和5年	第23版									
昭和6年	第24版									
昭和7年	第25版									
昭和8年	第26版									
昭和9年	第27版	学校経営 書籍出版	な	3000円以上5000円迄	ウ	普通	つ	10000円以上20000円迄	ク	常態
昭和10年	第28版	出版	の	負債	エ	稍薄	つ	10000円以上20000円迄	ケ	稍衰
昭和11年	第29版									
昭和12年	第30版	出版	の	負債	エ	稍薄	れ	30000円以上50000円迄	ケ	稍衰
昭和13年	第31版	出版	ら	3000円以下	エ	稍薄	よ	70000円以上100000円迄	ク	常態
昭和14年	第32版	出版	れ	30000円以上50000円迄	ウ	普通	わ	150000円以上200000円迄	ク	常態
昭和15年	第33版	出版	よ	70000円以上100000円迄	ウ	普通	か	100000円以上150000円迄	ク	常態
昭和16年	第34版	出版	る	250000円以上300000円迄	ウ	普通	わ	150000円以上200000円迄	ク	常態
昭和17年	第35版	出版	ぬ	300000円以上400000円迄	ウ	普通	を	200000円以上250000円迄	ク	常態
昭和18年	第36版	出版	ち	500000円以上700000円迄	ウ	普通	ぬ	300000円以上400000円迄	ク	常態

本稿で紹介するのは、以下の5編である。

- 1 巻頭言 教育宗教革命
- 2 教育宗教革命の提唱
- 3 創價教育學講座（第一講）
- 4 教育者煩悶相談
- 5 創價教育學會の活動

最初の巻頭言は、本文には著者名が書かれていないが、目次には、「（巻頭言）教育・宗教革命 牧口常三郎」となっている。

3番目の創價教育學講座（第一講）は、『新教』1月号より6回に亘り連載（2月休載）され、『教育改造』7月号で完結する「教育態度論」の冒頭の部分である。『教育改造』7月号の「創價教育學講座（第六講）」の文末には、「教育態度論を結ぶに當つては、従来の教育態度と創價教育學のそれとの比較對照が必要と思ふが、それは本誌本年一月號に要項を掲載したれば参照せられたい。」とあるが、「一、教育學革命に對する創價教育學の意義」がその要項にあたる。

5番目の「創價教育學會の活動」では、研究部例会において、「牧口所長は經と緯の觀點より、

教育者の教育態度に就いて比較論證され、我々の進むべき方向を指示された。」として「1、無計畫の注入主義と有計畫の指導主義」との発言要旨が掲載されている。前後関係を知る意味で、「創価教育學會の活動」全体を掲載した。

翻刻に当たっては、高橋貴代子ほか学生との共同作業で作成することができた。感謝を込めて付記させていただく。

## （本文）

### 資料凡例

- 一 原文は縦書きであるが、それを横書きに直した。
- 二 本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については新字体に改めた。
- 三 複数字分の繰り返しを示すおどり字は、ゝゝ、或はゝゞと字数分表記した。
- 四 誤字、誤植、脱字、誤記と考えられる個所には「ママ」と表記した。
- 五 行変えのため、やむをえず「。」や「、」を略していると思われる個所には「。」や「、」を加えた。

## 1 巻頭言 教育宗教革命

### 巻 頭 言

#### 教 育 宗 教 革 命

目的のハツキリせざる注入主義、人格主義の無計畫的盲動から目的と手段を確立せる計畫的指導主義の明動に教育法を改めんとするにあつて、目的は動搖不安なる<sup>(ママ)</sup>技 葉の如き近小生活法ではなく、遠大根本の不動なる生活大法を會得せしめ、最高の幸福に達せしめんとするにある。それには宗教を根柢とせざるべからざるが故に、宗教をも革命して最高至上の宗教の選定にまで至られざればやむ能はざる所である。

然らば宗教革命を如何なる目標に向つて進めんとするか。「法に依つて人に依らざれ」との釋尊最後の御遺言により、法よりは人に依つてゐるが爲に迷ひ、宗派の分裂、信仰の混亂を來たした今までの宗教觀を先づ改め、あたかも人に依つた専制政治を、法に依つた立憲政治に革めたやうにし、法の勝劣よりは法師の人格の感化を重んじたる從來の宗教を改めて、人に依られてゐた法師をして、法に依ることを指導させることとなし、以て現當二世の幸福を保證する最高最大の正法の歸依に達せしめんとするのである。即ち不確實なる人格主義、注入主義の教育を、確實なる指導主義のそれに改めると、全く一致する。

斯やうにして教育も宗教も、こちらの要求するところの目的と、向ふから豫約されるべき手段とを明かにし、且つその確實さまでも考へて、信仰を改めるならば、是までの曖昧不確實なる信仰を、半信半疑の間に續けるやうな不安を免れ、しかも両者は根幹の關係にあることの意義がわかるであらう。然らばこの教育、宗教の革命には、如何なる宗教宗派に屬するものとも雖も、苟しくも子孫の幸福を願ひ、祖先の冥福を祈るだけの餘裕あるものならば、反對することは出来ない

であらう。

果して然らば思想善導の先線に立ち、幸福生活の指導に任ずる教育者にも、教育は勿論宗教革命を、従來の如き不即不離、對岸の火事視する如き無責任の態度では居れないことになるであらう。然らば人を導く前に、先づ以て、自分の生活方法を反省し、一身一家の宗教革命を斷行し、遂に社會國家に及ぼすの覺悟と氣慨とが教育者にはなくてはならぬものでないか。これ吾々青年氣鋭の教育者にかたらひて、奮然教育革命を叫ぶに就ては、宗教革命にまで突進し、國民生活の改造の源泉を改めんとする所以である。さりながら斯かる根本的遠大の貢獻には所詮目前の小法を樂ふ臆病なる個人主義者には一顧さるべきでなく、現状の混亂を傍觀するに忍び得ない純眞熱誠の青年國士に於て、初めて共鳴さるべきものと信ずる。

斯様なることは固より營利の對象となり得るものではない。萬が一にも多少の利益があるとすれば、この革命運動に貢獻せんとするものである。

## 2 教育宗教革命の提唱

### 教育宗教革命の提唱

牧 口 常 三 郎

#### 一

政治でも經濟でも、宗教でも教育でも、社會の何れの方面も行詰つてゐると歎ぜられつゝあるのが、我國の現状ではないか。事勿れ主義を唯一のモットーとして來た官僚政府も、この現状に直面してはジツとして居られぬとして、大がかりの國策審議會を設け、その調査會は遅れ馳せながらも、調査し初めて居るらしい。

舊套墨守、現状維持を最も特色として居た文部省に於ても「牛に牽かれて善光寺詣り」といふ形で、教學刷新評議會を、居睡りしてゐた文政審議會の代りに設け、ボツボツし初めたやうであるのは、聊か意を強うするに足るであらうが、中心的指導者も、指導原理も持ち合せない澤山な船頭衆の集りが、遂に船を山に上さざれば仕合せでないであらうか。

#### 二

それはさておき、今日の行詰りだけの應急手當はともかく、明日の計畫に於ては、教育の改造に基礎をおかない如何なる改革も、所詮「砂上の樓閣」に過ぎぬといふ吾々の持論に、幾分なりとも近付きつゝあることは、次代の國民のために幸とすべきことである。

さて如何に教育を改造して堅固なる國策の基礎とするか。之が提案に任ずべき教育専門家を見渡しても、やはりそれを導く者も、指導原理の纏まつたものも、表はれ居ないやうであることを見ると、大なる心細さに堪へないものである。この時に當り「創價教育學」は微力ながらも教育革命の一原案として、一顧しないわけには行かぬものでないかと、憚りながら國家教育のために余は直言を敢てするものである。翻譯模倣の時代は疾うに過ぎ去り、教育も他の文化的諸分業と

等しく、科學的教育學の原理に指導されなければならず、常識の寄せ集めであつてならぬこと位は、門外者に却つて認識された時代となつたからである。ところが眞に教育法の改革をなすには正しい宗教に基づかなければ、龍を畫いて點睛を欠くが如きものであることが、創價教育學の研究の進むに従つて、明確に解つて來た。之は教育と宗教との分離を誇りとして來た文部省が、精神教育の不成績に鑑み、俄に「宗教的情操」の涵養を鼓吹し初めたのによつても證明される。

ところが無力と弊害とで、全く社會に信用を失つた現成宗教では、全く役に立たぬとして、中立不偏、不即不離の態度を取れと、文部省が警めた通りである。爰に於てか宗教革命の一大難問に遭遇した。

吾々が國家社會の生活改善の基として教育改革を提唱すると共に、教育改革の源として宗教革命を提唱する所以である。

### 三

教育革命の目標としての原案は、怨嫉を覺悟しながらも、無提案では進行が出来ないといふ悲しむべき現状にあるが故に、「創價教育學」をザツクバラにさらけ出して世の忌憚なき検討に任せ、寧ろ、瓦全を願ふよりは玉碎せんことを期するものであるが、宗教革命の目標としての原案はたとへ無成案なりとしてもさやうに無造作に出すことは出来ない。宗教に限り、ことに高級に上れば上るほど、下級のものは擧つて怨嫉をなすを先とし、眞面目に認識もし得ないのが、古來の實例であり、それは「一切世間怨嫉多くして信じ難し」との佛語の通りであるからである。

けれども斯かる感情上の狂態は、萬人が等しく「幸福生活」を願ふ限り、やがて覺醒するであらうから、軍縮會議に於ける日本代表のそれに倣ひ、各宗各派の要求に基づく自由なる検討によつて、一般の原則から限定し、遂に具體的に至らしめんとするのである。蓋し萬人の希望する所は一致する以上、之に應ずるところの最も價值高き、正しい法には自ら歸一するには相違ないであらうからである。

## 3 創價教育學講座（第一講）

### 創 價 教 育 學 講 座 （ 第 一 講 ）

牧 口 常 三 郎

#### 一、教育學革命に對する創價教育學の意義

教育學はあつても、實際に役立たぬので、床の置物位にしかなつて居ない。非科學的の、不經濟なる盲動は、今の教育に過ぎたるはない。

醫師がこんな事では飯の喰ひ上げである。依つて哲學者等の研究の結果を待つまでもなく、治療の經驗から歸納して醫學を成り立たせ、以てその職業の原理としてゐる。それで能率を擧げて得意先きの信用を得て商賣繁昌を謀つて居る。之は教育分業に手本を示すものである。他の生産業も大概そうしなければ、この生存競争の激烈な世の中に、立つて行けないでないか。

教育分業も祖先傳來の經驗を基礎とした教育技術を分拆綜合し、哲學者等の手を離れて、獨自の教育學を建設して指導原理となし、暗中摸索の盲動を脱して、計畫的成功を期待し得ることにしなければならぬ。即ち創價教育學の聊かこの渴望に添はんとする所であつて、これまでの目的觀もハツキリせず、従つて方法觀などには頓着なく、漫然と熱心とか努力とかいつて行動するが爲に最低の能率しか擧げて居らず、入學試験の間際になつて初めて狼狽し、準備教育などに人の子を賊ひつある注入主義や人格主義の教育を改めて、科學的原理に指導された計畫的方法による指導主義の教育に改革せんとするのである。

## 二、教育宗教の革命と指導階級

注入主義人格主義から指導主義へ轉換し、指導方法が教師の研究の主題となつた、この教育革命は、『依法不依人』の佛語により、人に依られてゐた法師が、法に依ることを指導する地位に降り、最高最大の正法に歸依せしめることを本務とするに至る宗教革命と相待つて、國家社會の上流に立つすべての指導階級の覺醒をうながし、指導方法と、その原理の研究に向はせなければならぬ。さもなければ、下流に於ける國民生活の混亂は永久に清掃される期がないであらう。これは今の世相險惡、思想混濁の根本が、<sup>(マ)</sup>技葉末節ではなくて、却つて上流に立つ指導階級の迷盲にあると云はねばならぬからである。何をか指導階級の迷盲といふ平常卑近の生活に對する<sup>(マ)</sup>技葉の如き小法に對しては科學的知識を以て盲者を導くやうに贅然と指導し得べくも、非常遠大の生活に對する幹根の如き大法に對しては科學的知識は日中の提灯に及ばず、迷妄の程度に於ては無知盲昧と選ぶ所はない。のみならず、知つてゐるといふ自惚れに執着するが爲に、認識もせず、に評價し、少しばかりの常識の秤を以て、はかり得ぬ大量をはからうとして、杓子定規の錯誤に陥ることを悟り得ないからである。

## 三、教育原理として<sup>(マ)</sup>價值論

『彼は何と云ふ者である』といふのと、『彼は利であり、善であり、美である』といふのとは、等しく判斷したのではあるが、全くその性質を異にする。前者は實在を判斷したのであるに對して、後者は價值を判斷したのである。實在判斷は對象と對象との關係を客觀的に觀て、理智的に限定したものであり、それに對して價值判斷は、對象と人間生命との關係を主觀的に感じ、感情的に限定したものである。眞か偽かといふ判斷は、以上の實在判斷と價值判斷とが、果して正當か否かを、第三者として判定したものであつて、前二者の判斷を更に再判斷したものである。而して前者が對象を判定したのであるに對して、後者はその判斷をした人を對象となして、判斷の仕方の正否を批判したのである。

されば眞と善美とは、決して同一の範疇に屬せしむべきものではない。判斷さるべき對象の性質を全く異にするものである。眞偽の判斷は價值判斷にあらず、實在判斷にもあらず、判斷者の判斷の仕方を更に再判斷したものに過ぎない。

然るを眞善美を一系列の概念となし、價值の範疇に屬せしめることは全く認識を誤つたものである。されば所謂『眞理』とは、實在又は價值といふ原判斷を再判斷して、その誤りなきことを

保証した表現にしか過ぎない。それをたゞ道理といふとも内容に於て少しも増減あることはない。眞美・眞善が、只の善美と異つたものでないのと同じで、それを眞理といへば、實在をも価値をも超越した神祕的崇高なる或るものゝ如く思ふのは、學者の權威に盲從して言語の意義の闡明を怠り、概念の正確を缺くことを意としない結果である。斯様にして眞と善・美とを峻別し、眞偽の概念を価値の概念から排除して、然る上に再考して見ると、善惡、美醜とは同種類にして、しかも根本的の重要な一概念の、意識されずに居るものがあるのを氣付くであらう。利害の概念がそれである。

かく思ひ出して利・善・美又は害・惡・醜と、一組織の概念となし、相互の性質を比較綜合するときは、利害こそ何人にも最も卑近に直覺し得べきものであり、他の兩種の価値概念は、それから類推して初めて了解せらるべき性質のものであり、其の實在性質の中に於ける程度の差に過ぎないものなることが解るであらう。

所謂『眞理』なる概念をかくのごとく再認識して、価値の概念から排除すること<sup>(ママ)</sup>すると、從來眞理が、善美と同様に、人間の理想の一対象であるがごとくにして、しかもそれは何等検討の餘地もない自明の理の如く見做されたことの誤謬であることが解るに就ては、人生の目的に對しても、從來の見解を再検討しなければならぬことゝなるであらう。

『眞理』は人間の理想の對象となり得る性質のものではない。それは『實在』が人間の理想の對象となるに足らないと同様である。

世には『眞理』を愛し、『虚偽』を惡むといふものがあり、大概の學者がさう考へてゐるやうであるが、果してそんな性質のものであらうかは冷靜に見直す必要がある。眞偽を善惡美醜と同様に見做せばこそ、さやうな見解が生ずれ、實在及び価値の判断を再判断したのが、眞偽であること前述の如しであれば、愛するも惡くもあり得べからざるものであらう。いくら愛しても惡くなくても、等しく眞の道理には服従しなければならぬのが、人間の運命であるからである。

教育手段の第一歩として、認識及評價 鑑賞 の指導をなさんとするものは、先づ以てこの根本問題に注意し、從來の歐米哲學の誤謬を修正して、この基礎を確めてかゝらなければならぬ。創価教育の價值論が聊かこの根本問題から内外の學者の注意を促しつつある所である。

#### 4 教育者煩悶相談

##### 教育者煩悶相談

(〆何なりと相談に應じます。遠慮なく持ち込んで下さい。〆)

若い教育者の嫁取り相談に應じて

牧 口 常 三 郎

##### 一、結末の見通し

親友なる少壯教育者から嫁選びの相談を受けてそれは僕にはとても出来ない相談だと、キツバリ斷つたら、彼は顔をふくらして怨みを見せた。そこで次の問答が初まつた。



君は最高の正法としての法華經を僕が信仰してゐるのを知つて、之に共鳴せざるのみか、却つて嫉ん<sup>(ママ)</sup>だはないか。なるほど怨嫉といふ語はあたらないかも知れぬけれども、輕蔑の色を表したでないか。心中に少しでも嘲笑したとすれば、怨嫉と異ひはあるまい。『斯經は如來の現在すら嫉怨多し、況や滅度の後をや』との釋尊の豫言を、君は明かに證明して呉れたのである。お蔭で經文の偽なきを驚く、一つの實例を示され、それだけ信仰を深めるを得た。世の中の善人といはれる君の如き階級が、案外に大概それであるのは、敢て珍とするに足らないが、惡口、罵詈する上、更に瓦石を投げ、刀杖を加ふる氣遣さへも此の經に對する限り出現するのを、いつでも直ちに實驗し得る所であるので、それまでに至らぬのはまだお互に仕合せと余は考へ居るのである。それには随分驚異さるべきことはないか、だがそれは嫁取り相談を持ち込んだのを斷つたのと何の關係がある。なるほど嫁取り相談と法華經の信仰とは頗る遠い關係には相違ない。それと之とを結び付けて差引勘定せんとするのは『大風が吹いたから桶屋が儲かる』といふ類に相當するといふかも知れないが、それに相當の因果の關係があるから、こゝにいふのであるが、君にはそれを聴くだけの雅量があるかどうか。もしもそれがなければ今加へられた嫁取り相談の謝絶の怨みと、前の法華經信仰拒絶の怨みとを以て相殺するによつて、余の受けた損害は零となつたから、これでお仕舞ひとすべしだが、君はそれで不満足ではないのか。然り余には差引零で満足するを得るが、君にはよも満足は出來まい。何となれば嫁取り相談の目的へは一歩も進んで居ないからである。

## 二、どんな嫁が欲しいか

君は如何なる嫁を欲するか。いふまでもなく、善人であらう。然らばその所謂善人とは如何。ウソつきと、利己主義者ではあるまい。心がひねくれて陰日向があり、身じまひのみして人の事は一向無頓着の人は、いくら美人でも困りはせぬか、顔は人並みに我慢するとしても、正直で、親切であることだけは要求するであらう。

それを余に相談するからには、余も亦たそれだけの條件を満たすものを心配することに於て正直であり、不親切でないといふことを信用するからのことであらう。それを余も亦た信ずるが故に敢て謝絶せんとする所以である。その理由は如何。それだけの條件の人を如何にして保證するか。口では如何に巧に表すとも、目の行は如何に正しく表はすとも、誰れが<sup>(ママ)</sup>末來、永久變りなしと保證し得るか。「女の心と秋の空」とはあまりに言ひ古された諺でないか。自己生命の便宜のために外觀に表す一時的偽瞞でなくして、永久に變らないといふ保證がつくのは心の底から、ウソをつけず、不親切であり得ないといふ、見通しつくものでなければなるまい。

## 三、どうしてそれを見出すか

### その鏡はないか

さてこの見通しは如何にしたらつけられるか。

法華經の鏡に照すより外には恐らくは現在の世界に何物もあるまい。何故に法華經が心の鏡か。一たい惡人とは善に反對するが爲ではないか。もしも眞に心底から善であるならば、善人に對し

て喜んで賛同する筈であり、従つてそれがもし惡に對したならば、敢然と反對するに相違ない。然るに惡に對して反抗し得ず、善に向つて反對するのは、惡心を秘藏するが爲でなければなるまい。然らば法華經を信仰し得ずして反對し、且つ怨嫉輕賤する性質のものは惡人といはれても仕方がないではないか。何となれば法華經は善人の理想する正直と慈悲心との最高最大の教へであることは、理解すればするほど、明々嚇々たるものであるからである。もしも之をいふ余が心事にさへも疑を抱くならば、もう言語同斷である。

余が法華經に對し奉つてこれだけの信仰を得るに至つたのは決して一朝一夕の頃ではない。他人の意見説明に動かされたのではない。前佛たる釋尊の豫證として遣された法華經を、龍樹、天親、天臺、妙樂、傳教等の諸菩薩が解釋され、日蓮聖人が、その豫證通りの、時代と國とに出現され、身を以てそれを現世の國民生活に實證されて、後佛たることを、證明せられた上、なほ且つ前諸佛の表はし給はなかつた法華經の肝心たる三大秘法（本門の本尊本門の戒壇本門の題目）を表はされ、以て末法相應の生活原則を示して吾々を救護されたのであることを、日蓮正宗唯一つによつて傳へられる教義によつて知得し、それを更に自他の日常生活に當て嵌め、實驗して見て愈々それが哲學的な觀念論にはあらずして、科學的な且つ藝術的な實證主義的な普遍の眞理であると理解するに至つたからである。

#### 四、善行を保證する力は何か

斯くて善惡辨別の鏡としては法華經に過ぎた經文はなく、従つて之を信ずる限りに於て、善人たる保證を與へる者がこの經以外にないといふことを確信するに至つたからである。而して之れは左の反證が擧らざる限りは、決して變ることはないと、斷言して差支ない。敢て忌憚なき検討を希望するのである。

一、法華經の信仰の如くに善惡を保證し得るものが他ににあるであらうか。

二、眞實に法華經の信仰するものにして、善人たることを保證されないものがあるか。

これは又た何故か。法華經の肝心なる三大秘法は一切惡の根本原因たる「元品の無明を切る大利劍であり、心の闇を照す大燈明である」と、佛の言はれた通りに實證されることが、前述の如くであるからである。そこが妙法の名に價する不思議の力の伏在する所である。

これが果してその通りであり、吾人の言ふことが偽りでないといふことを確める爲には、ともかく信じ如實に修行して見れば必ず君に對しても出來ると確信するが故に斯くは自信を以て斷言するのである。それ等の積極的の効能はともかくとして信じて有害でないといふことだけはまさか疑ふ餘地はあるまい。それさへも疑ふとならば最早言語同斷なることは前陳の通りである。

#### 五、婿殿たる君の保證はどうする

今まで論じて來た理由によつて、法華經の信仰者はその明鏡に照して、善人たることを保證することが出來、それこそ君の望むところであるとして、それを周旋するとなると、茲に至つてハタと行詰つて一考しなければならぬことが生ずる。これは希望者その人に對して、今一度考へ直さなければならぬこととなるからである。

假りに君に對して希望の條件を具するものを見出して保證するときは、同様に他人に向つても君を保證しなければならぬはめに、陥らざること得ないからである。何となれば君が望むと同様に、先方にても希望があらねばならず、それのない位のものなら、それこそ何んでも構はぬといふ相手であるからである。そこで君を然らば如何にして保證するか。先方を保證するに法華經の信仰を以てする以上、君をもやはり法華經を以てしなければならないではないか。

眞の善人ならば、法華經の信仰の出来ない筈はない。それが出来ないなら惡人に相違ない。そこで、信仰して居る限りは、未來と雖も不善に陥るわけがない。故に法華經の信仰を以て善人たることを保證するといふので先方にはそれを要求しながら、自分はそれを拒絶するとして、その保證が出来ないとしたらば、最早お話にはならぬではないか。是が余のあえて最初から出来ない相談だと卒直に明言して君の怨嫉を厭はない所以である。要するに善人たるの保證がある嫁を要求せんとすれば、先づ以て自身も善人たる保證を得るだけの途をとらねばならぬ。それが爲に法華經の信仰以外に、此の世の中には如何なる方法もないといふ所以である。

#### 六、當てにならぬ約束

彼の願が叶ふたならば、信仰に入らういふが如きは、取らぬ間は今まで通り惡をつづけるが、取つてからは善人たることを誓ふとするといふが如しであらふ、若し然らばこれほどあてにならぬことはない。こんなことで嫁をさがすのは、普通の桂庵ならばいざしらず、僕には責任を以つた周旋は出来ないのである。

こんなわかり切つたことでも宗教の本質を知らぬものゝ間には、随分臆面もなく交換されて居るのを見るが故にいふのである。いやしくも宗教の信仰者たるものがこんなことを條件とするならばそれこそ善を興へる代りに惡でも受けよと押賣りするに類し、妙法を冒瀆し奉ること大なるものである。

如何にかして人格の善惡の鑑別をなし、その上に將來にも善をなし、惡をせぬといふ保證をしなければならぬのが婚姻媒介者の重大責任であるのにその責任をはたすに足るだけ保證は、是までの人力では到底覺束なかつたところ、圖らずも保證の出来る妙法に逢ひ奉ることを得たので、かくは云ふのである果してどれほどの理解がされたであらうか。

#### 七、人の運命の豫想

なるほど人の鑑別は種々の方法を古來工夫してあるには違ひない。その人を知るにはその友を見よ。その好む所を知りその樂しむ所を見よとか色々の方法がある。がしかし心底の正邪を適確に透見することは、聖人高僧と雖も至難として、鑑定を誤まつて却つて飼犬に手を喰はれた様な目に逢ふ例が少くない。人相手相など易や八卦などゝ色々の方法もあるやうだが、これまた安心して實際生活に役立たせるまでに至つて居らぬ。

こゝに唯一つの方法がある。恐らくは之にまさる方法は古今東西に如何なる人間でも舉示したものはあるまい。それは法華經の鑑に照することである。

これに照されると心のどん底に秘藏された歪みが忽ち暴露して隠すことが出来ない。正邪善惡

の辨別はハツキリして適中せざるなしである。故にこれさへ持つて居れば詐欺にひつかゝる心配はない。そして之によつて鑑別した友達には最早絶対の信用をしてもよい。尤も當方に邪心を持つて居て此の鏡を利用しては、それは無駄である。そこでこれによつて選定された友人なら、それこそ眞の異體同心の美しい團體が出来る。僕等にはまた多數には上らないが、數十人の仲間が出来て居る必要とあらば何時でもお見かけられる。

然らばその鏡を如何にして手に入れ、どうして利用するか。即ち如何にして法華經を正しく信仰するか。それを教へて上げたいのは山々でも、輕々しくいふては却つて輕賤し誹謗せしめるに留まる心配があるから時節が来るまで保留しておかねばならぬ。知りたければ錢も金もいらぬ。たゞ怨嫉と輕蔑とを誡め、誠を以て希望すれば、いつでも御需めに應ずる用意がある。

## 5 創價教育學會の活動

### 創 價 教 育 學 會 の 活 動

#### 一、研究部例会

十二月十一日午後六時より一ツ橋教育會館に開催。當夜は本學會顧問秋月左都夫閣下の御臨席を辱うし得た事は本會の光榮とする處であり、御老齡益々憂國の御志深く、教育革命を標榜されて奔走されて居られる貴重の時間を割いていただいた事は、會員一同の感激に堪へない處であつた。

最初に研究部員として特に書方教育研究實踐に功績を上げて居られる三矢孝氏の研究發表があつた。詳細を掲げる事を略すが、本誌十一、十二月號掲載の指導案實施の成績發表と、成績物處理法について詳説された。要するに最大多數の兒童の成績向上と、その方法論の科學的、計畫的、經濟的な點等に於いて、未だかつて教育界に知られなかつた優秀なる教授法たる事を確信し得るものであつた。

其間牧口研究所長をはじめ會員の眞摯な批判討論があり、特に秋月顧問の質問批判は多年畠達ひの方面に活躍された人として、意外に思はれる程機微にふれたるものがあつた。

次いで牧口所長は經と緯の觀點より、教育者の教育態度に就いて比較論證され、我々の進むべき方向を指示された。

#### 1、無計畫の注入主義と有計畫の指導主義

從來の教育は注入教育が悪いと主張しながら、注入以外に何等の工夫もしない所に現代の病弊を齎したのであるが、新教育に於ては注入すべき教材は教科書を読み易くすることによつてそれに譲り、教師の主力をその理解應用の指導に向けしめる。従つて注入主義を指導主義に轉換し指導法の研究と熟練を以て教師の分業價值とすること。

知識した知識を詰め込むにあらず知識することを指導すると共にそれを生活に役立てることを指導することこそ今後の教師の使命でなくてはならぬ。その指導法を研究せんとするのが本當の

仕事である。

2、無方法の注入主義の反動として起りながら、何等客觀的方法に達せざる、主觀的開發的の舊教育法を系統的方案を具した客觀的啓發主義的教育法にしたいと云ふのが新教育の要求する所でなければならぬ。

3、理想的な教師を得て之に一任せんとするのみの、虚妄なる人格主義と、現實の教師に即して成績を擧げんとする實際的方法主義。

從來の教育は教師の人格を模範とすべく人格主義の教育が常に社會から要求されてゐたが、眞に人の模範となるやうな人格者は滅多にない所から、人格者を装ふ所の虚偽の模範を示すと云ふ重大なる弊害を生ずるのであるが、新教育に於ては理想的の人格を別に高く掲げてそれに達する工夫を指導することゝなす事。

#### 4、秀才標準の放任主義と劣等標準の計畫主義

從來の教育は學級中の秀才階級を相手となし、中以下の劣等などはとかく眼中におかない傾向があつたが、新教育に於ては劣等生を主眼としたる全體の指導を目的とする。

5、個性尊重の個別指導主義と共通性尊重の全體指導主義。

6、因果法則を意識せざる盲目的追隨主義と因果法則に遵據したる明目的先導主義。

7、幾分かの成功にも満足する偶然的の盲動主義と全部の成功を目指す必然的の明動主義。

(イ)、學級の一部分ではなくて全體に亘らなければならぬ。

(ロ)、施した勞力の幾部ではなくて全部であらねばならぬ＝百發百中の教育。

(ハ)、いつかは熟すであらうといふ他日を期するではなくて直に成功しなければならぬ。＝因果同時の教育。

8、教師の活動に主力を注ぎ、子弟の活動を従とする教師本位の指導方法ではなくて、子弟の活動を本位として指導せんとする子弟本位の指導主義でなければならぬといふのが創價教育學の提唱する所である。

6、全面的、全體的、因果同時的な合理的指導主義の教育法といふても、一個人が經驗し發明したといふが如き<sup>(ママ)</sup>技業的垂迹的觀念論的のものではなく、又全人類の總經驗の成果たる根本的のものとはいひながら、具體觀念の充實せざる抽象概念論的のものでもなく、それ等の綜合統一された本末一貫首尾貫徹の指導方法こそ、新教育學の要求する所でなければならぬ。

10、以上で今後の新教育に於て要求する所は略々盡きるであらうがそれは萬人の共通性を認めて之に適當する一般的な教育方法の抽象的概念である。故に之を萬人異別の個性に適應するやうに實際的に具體化するには、たとへ優秀の教師と雖も非常の熟練を要することは論を俟たぬ所である。教育技術は人生のあらゆる藝術中に於ても最も複雑困難なる藝術であらねばならぬからである。

最後に秋月顧問は、佐藤一齊の

『性相同じ教の立つ所以也。質相異り教を設くる所以也』といふ言葉を引用され、所謂個性尊重、自由放縱、思ひつきの教育方法を論難され、本會の活動に絶大な讃辭を賜つたが、最後に『本會の活動を益々隆盛ならしめて、國立の研究所まで盛り立て、我國の教育を根本的に改造す

るために一層努力されたい。』と激勵された。

午後十時閉會。

## 二、教育問題座談會

東京市内各地に於て、本學會研究部員を中心に多數愛國青年教育者の熱誠なる座談會が催されてゐる。

## 三、教育、宗教革命研究會正法研究部例會

十二月八日午前十時より杉並區和田本町歡喜寮に於て、日蓮正宗の高僧堀米泰榮師の御講話開催。

## 四、教育、宗教革命研究會法門研究部例會

十二月十七日午後六時より品川區上大崎時習學館に於て、堀米泰榮師による一念三千の法門の講話開催。

尚東京市内各支<sup>(ママ)</sup>那に於ては既成宗教、インチキ宗教に對する嚴正批判會を行つてゐる。

## 五、本學會のパンフレット配布

本學會編新教別刷『赤化青年の完全轉向は如何にして可能なるか』を全國教育關係者、國家の要職にある人々に配布する豫定。(矢島)

(パンフレット御希望の方は新教編輯部宛御込あれば贈呈致します)